

## 序

学院創立90周年を明年に控え、何となく気ぜわしく、追いたてられるような気がしてならない。してみたいことが山程ある中で、やはりいちばん何か 期待に似たものを感じさせるものは教授の方々の研究業績である。

このことの故にその大学は高くもなり、低くもなるからである。

4号に於てかねてから願っていた各科に亘ってのものが少しではあるが実現したことは幸であったけれど小規模のものであった。

この度のものもやはりその域を脱することが出来なかったが、若い方が加わったことは何ととっても嬉しいことであった。

新発見でも、新学説でもない。日頃の研究の積み重ねであれば充分である。

研究生活に没頭しているうちに救主降誕の星を発見した3人の博士の物語は暗示に富んだ話である。研究生活の中に光を見出すのであり、それなきところに光はあり得ない。

展覧会出展を目的にしたものばかり画いていると真の作品は出来ないそうである。紀要のための研究だけでは真の研究は実らない。日頃の研究生活の余滴がこうしたことに表われるところに真の価値があるのである。

いつも真剣な発表をされた上野武君が九州に去って淋しい気がするが、新鋭森田講師が加わったことは有難いことであった。

多忙の梶井教授が出版の世話までされたことを感謝し、明年への更に大きい期待をかけて序にした次第である。

1973. 12. 15

北陸学院短期大学学長

番 匠 鉄 雄